

63 同志社大学設立の旨意

一八八八(明治二十一年)十一月

【一三〇】新島が公的に自己の所信を活版で公刊した著作としては数少ないもの。彼の教育思想が鮮明にうかがえる。ただし厳密に言えば、これは実際には新島(四十五歳)が材料を提供し、徳富猪一郎(二十五歳)が文章に仕立てあげた点で「共著」である。私立大学ならびに徳育(心育)の重要性から説き起し、「二国の良心」ともいうべき人々を育成する重要性で締めくくられている。

〔今こそ大学を〕

私たちが私立大学を設立したいと願ったのは今日に始まったことではない。そしてそのために計画を立て、苦勞をするのも今日に始まったことではない。今では計画はほぼできあがり、〔実現の〕時期がようやく訪れようとしている。そこで私たちは今日こそ、これを全国に訴えて、全国民の力を借り、この計画を成就させなければその時期は再び巡って来ないと確信する。これこそが、私たちがこれまで立てた計画を詳しく述べ、同時に大学を設立する目的をどうしても訴えたいと思う理由である。

思い返すとすでに二十年以上も前になるが、幕政の末期、外交が切迫して人心が動揺した際、微力な私ではあったが海外留学の志を抱いて〔安中藩から〕脱藩して箱館に行き、ついに元治元（一八六四）年六月十四日〔陽暦七月十七日〕の夜、ひそかに国法を破ってアメリカの商船に乗りこんだ。

船員となって労働に従事することおよそ一年で、ようやくアメリカのボストンに到着した。幸運にもかの国の博愛心の厚い人に助けられて、〔フィリップス・アカデミーをへて〕アーモスト大学に入学し、続いてさらにアンダーヴァー神学校に学び、前後十年あまり苦學を重ねた。

きた。

この視察をとおして、欧米文明の基礎は国民の教化にあることをますます確信するようになったので、わが国を欧米の文明諸国に匹敵させようと思えば、ただ外面的な、物質上の文明を模倣するだけでなく、ぜひとも文明の根本に向けて力を注がなければならないと信じるようになった。そこで力不足ではあるが、いつの日か日本に帰国したならば、必ずひとつの私立大学を設立してわが国のために微力をつくしたい、と心に誓った。

〔同志社英学校の設立〕

明治七年、アメリカから帰国する際にたまたまアメリカン・ボードの年会が〔ラットランドで〕あり、アメリカの紳士、淑女が三千名以上も集まった。この集会には友人が大変多く参加したので、私もその集会に誘われ、同時に別れのあいさつをするように頼まれた。そこで私がかねてから抱いていた志を初めて打ち明けて、こう言った。

「今やわが国は社会の秩序が破れ、規律が乱れ、人心は向かうべき方向が分からない状態である。輝くような文化の光を今日の日本に実現しようと思えば、どうして

〔教育こそ文明の基〕

こうしてアメリカの事物や制度が盛大である様子を見たり、すぐれた人物や人格者に接して意見を聞いたりした結果、アメリカの文明は決して突然にまた偶然に生まれたものではなく、必ず原因があるということを知った。そしてその原因がすべて国民を教化するのに熱心であったことにあるのに気づき、初めて教育が国の盛衰に深く関係するのを確信した。以来ひそかにこの身を教育事業に捧げようと決心した。

明治四（一八七一）年、亡き岩倉〔具視〕^{ともみ}特命全權大使らがアメリカに来られた時、文部理事官の田中不二麿氏が欧米諸国の教育事情を調査するために一行中に加わっておられた。ちょうど私はアンダーヴァー〔神学校〕で学んでいたが、とくに選ばれて文部理事官に随行するように命じられたので、理事官とともに北米中の大学、中学校、小学校を視察してまわった。

さらにヨーロッパに渡り、ドイツ、フランス、イギリス、スイス、オランダ、デンマーク、ロシアなどの諸国をまわって、学校の組織や教育制度を始めとしておよそ学制に関することを少なからず観察し研究することがで

も欧米文化の根本である教育に力を注がねばならない。思うにわが三千余万の同胞の安全と危険、不幸と幸福とは、単に政治の改良によるのではなく、また物質的文明の進歩によるのでもなく、まさにもっぱら国民を教化する力にだいであることを確信する」と。

ここまで述べると思わず涙がこぼれそうになったが、さらに話を進めて言った。

「それゆえ、帰国したならば、必ずこの教育事業に微力をつくしたい。満場の皆さま、私の真心をくみとつて、支援していただけないでしょうか」と。

話が終わらないうちにたちまち満場の紳士、淑女が大いに賛成してくれたので、即座に数千円の義捐金を得ることができた。こうして明治七年の末に長年抱いていたひとつの志を胸に秘めて、十年以上ものあいだ夢にまで思い浮かべたわが国に帰国した。

明治八年一月、〔大阪会議に出席した〕内閣顧問であった故木戸孝允氏にたまたま大阪でお目にかかったので、かねてから抱いていた志を打ち明けたところ同氏は深く称賛され、もっぱら政府要人の間に斡旋して私の志が実現するように力を貸してくださった。

また前の文部大輔、田中不二麿氏や前の京都府知事、

* 榎村正直氏も賛助してくださったので、ついに「京都府顧問の」山本覚馬氏とふたりで同志社を結社して、私塾開業の認可を得、ただちに明治八年十一月二十九日に同志社英学校を設立した。これが現在の同志社設立の始まりなのである。

「キリスト教に基づく德育」

このようにして同志社は設立されたが、その目的はただ単に普通の英学を教えるだけでなく、徳性を磨き、品性を高尚にし、精神を正しく強めるように努め、ただ技術や才能のある人物を育成するだけでなく、いわゆる「良心を手腕に運用する人物」(良心の全身に充滿したる丈夫)を産み出すことに努めてきた。しかもこのような教育は、一方に片寄った智育だけでは決して達成できるものではない。またすでに人心を捉える力を失っている儒教主義が行えることでもない。

それはただ神を信じ、真理を愛し、他者に対する思いやりの情に厚いキリスト教の道徳によらなければならぬとい信じて、キリスト教主義を德育の基本とした。私たちが世の教育者の傾向と違っているのもこの点である。そして同志社が数年の間、いばらの苦難のなかに埋もれ

ていたのもこのためであった。

こうした時にあたり、私たちの置かれた境遇は実に哀れむべきものであった。見渡すばかりの広大な世界のなかでまことに友人がひとりもない状態であった。キリスト教主義の德育は愚かな人たちから嫌われたばかりでなく、世の徳の高い立派な人たちからも非常に冷たくあしらわれた。

けれども私たちの同志は、真理こそ最後の勝利者であると信じ、互いに助け合い励まし合って、志すところを着実に穏やかにしっかりとそしてひたすら実行してきた。幸いにも世論が一変し、自分ではキリスト教を信じていない人でもキリスト教がほんとうに一国の道徳を維持するの力があることを認め、世論がキリスト教に賛成するような風潮になってきた。

その一方では同志社の教育の実績がようやく現れて、その教育が丁寧で親切であること、ならびに德育と智育とがふたつとも並行して行われ、決して片寄った教育に陥ってはいないことがようやく世間の人たちに認識され始め、同志社はまことに学生を安心して委ねられる学校である、との信用が社会に広まった。

明治十四、五年ごろになると学校の規模がしだいに大

きくなり、入学者の数もだんだんと多くなり、卒業生の数も徐々に増え、学科の程度もますます高度になってきた。その結果、保護者のなかには普通科だけでなくそのうえに専門科を設けてほしいと要請する人が現れるにいたった。ここにいたって私たちの長年の願いである私立大学の基礎がようやくできあがった、と言っても必ずしも誇張とは言えないであろう。

とはいってもこの私立大学は実に大事業である。これを設立するには多くの人間が必要である。多額の金銭が必要である。私たちは誰に對してこの志を語り、誰とともにこの事業を行ったらよいのか。幸い一部の人たちの信用を得ることができたとはいえ、私たちの当時の状況は全く孤立状態であった。

「京都での運動」

けれども沈黙したままで留まっていはいけないうで、この時以来、有志が協議して熱心に支援者を世に求めた。その結果、各地で賛成者が次々と得られたので、ついに明治十七年四月に初めて京都府会議員を(商工会議所に)招待して数回の演説をし、私立大学創立の目的を説いた。主だった人たちから賛成が得られたので、こ

こにおいて大学設立の目的を述べた「明治専門学校設立の旨趣」と題するパンフレットを発行して、支持を広く世に求めた。これが私立大学設立を手がけた最初の一步であった。

幸いこの計画は世の有力者から賛成を得たのであるが、当時は社会が一般的に不景気(いわゆる松方デフレ)であつたので、支持者はいても寄付者はなく、寄付金の予約はあつても入金はなかった。私たちの計画は中止にひとしい状態であつた。しかも私はこの間に「静養のために」再び外国に旅立ち、同志社大学設立事業を同志の皆さまに委ねたので、この間の進行はもっぱら緩やかなもので、これといった進展はなかった。

要するに明治十七年六月から二十一年四月までに大学設立のために集まった金額は、予約と払い込みとを合計してもほぼ一万円に達しただけであつた。そして本格的に大学設立事業に取り組んだのは、実に今年になってからである。

今年は私たちの計画にとっては幸運な年である。京都では四月に知恩院で大集会を開き、府下から六百五、六十名の有力者を招待して、私立大学設立の支持を求めようとした。そして北垣京都府知事なども自ら熱心にこの

事業に賛同されただけでなく、府民にも支持するようにとの演説をしてくださった。

以来、京都倶楽部で「募金」委員会を開き、すでに募金活動に入っている。募金高はまだはつきりとはしていないが、京都府民の皆さまはきつと私たちの希望を無にすることは無い、と確信する。

〔東京での運動〕

このように京都で募金に着手したのに対して東京はいえ、全く手を着けなかったわけではない。今年四月に私は東京に向いて大隈〔重信〕伯爵、井上〔馨〕伯爵、青木〔周蔵〕子爵などに面会し、かねての志を打ち明けたところ、これらの人たちから非常な支持を受けた。とりわけ大隈伯爵と井上伯爵とは今年、京都まで出て同志社英学校を視察され、自ら学校の様子をご覧くださり、学校の成果を大いに称賛してくださいました。したがって専門科を設けて学校の程度を高めることについてはなおさら私たちの志に賛同してくださいました。

さらに京浜地方の資産家の諸氏に向かつてかねての志を打ち明けたところ、幸い彼らも大いにこれに賛同され、ついに東京で今年四月から今月までの間に次のような寄

付金を得ることができた。

一千円	大隈伯爵	三千円	岩崎久弥氏
一千円	井上伯爵	二千五百円	平沼八太郎氏
五百円	青木子爵	二千元	大倉喜八郎氏
六千元	洪沢栄一氏	二千元	益田孝氏
六千元	原六郎氏	二千元	田中平八氏
五千元	岩崎弥之助氏		

このほかにも後藤〔象二郎〕伯爵、勝〔海舟〕伯爵、榎本〔武揚〕子爵のような人も皆、私たちの志に賛成され、金額はまだ未定ではあるが、寄付は必ずすると約束してくださいました。そのうえ今年五月にはアメリカの友人たち〔アメリカン・ボード〕から五万ドルの寄付、そしてさらに今年の八月にはアメリカの友人〔J・N・ハリス〕から一万ドルの寄付の申し込みを受けた。こうして今日にいたって私たちの二十余年来の宿願はようやく国の内外の賛成を得て、今まさに実現のための手がかりをつかもうとしている。

これを受けて私たちは全国の協力者に訴え、この計画を一步前進させるにはこの時をおいてほかにはないと確

信する。今やわが国の主な政治家のなかでは井上伯爵や大隈伯爵、勝伯爵、榎本子爵、青木子爵のような人たちが皆私たちの志を援助され、そのために募金斡旋の労を進んでとってくださいている。各地のその他の資産家にしても、私たちの志のために寄付を行い、斡旋の労を進んでとられる方が徐々に多くなろうとしている。

けれども、大学設立の事業はまことに一大事業である。全国民から賛成を得て、その力を借りなければ、実現は実に困難である。私たちが沈黙しておれないのは、まさにこのためである。

〔同志社の現状〕

さて現在、同志社が立っている地点を考えて見ると、私たちの企てが決して架空の望みではないことが分かるであろう。今では同志社は理事を増やしたり、学則〔寄附行為〕を設けたりして、学校経営の基礎を確固たるものにした。そして本校に所属する諸学校は、同志社英学校、同志社神学校、同志社予備学校、同志社女学校を数え、そのほかに〔同志社〕病院があり、それには看護学校〔京都看護婦学校〕が付属している。詳細は次の表を見れば、明白なはずである。

そして現在の同志社の地位を引きあげて高等学校〔カレッジ〕と同様のレベルにするにはもはや一年もかからないであろう。すでにわが同志社はこのような位置にまで達している。今日、この普通科の上に専門学科を設置するのは、もはや止められない勢いであり、避けられない動きでもある。今こそ大学を設立しなければならぬ時期にきたと言うべきであろう。

大学は学問の仕上げをするところである。すでに普通学科を修めて、なおも余裕のある者は、ここに学ぶべきである。大学は教育制度のうえで最高の位置を占めている。今では同志社はすでに程度の高い普通科を教える学校となつてゐる。このうえさらに専門科を教える学校とならなければ、いわゆる「九仞の功を一簣に欠く」〔最後の詰めめの甘さのために永年の努力がすべて無駄に終わる〕ことになる。だからこそ現在の同志社には私立大学を設立する時期がいよいよ迫ってきた、と言えよう。

〔私立大学の目的〕

以上、これまでは私立大学を設立する事情を詳しく述べてきたが、ここからは私たちの目的をすこし述べてみたい。

同志社諸学校統計表 (明治二十一年十月一日)									
種別	種名	同志社	英学校	予備校	神学校	女学校	看病婦学校	病院	合計
創立年月	明治八年十一月	同上	同上	明治二十年九月	明治九年十二月	明治十年四月	明治二十年八月	同上	
現在位置	京都上京区	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	
社員現数	九	上	上	上	上	上	上	上	九人
教授現員	十七	上	上	上	上	上	上	上	三四人
外国教師	八	上	上	上	上	上	上	上	一〇人
同女教師	八	上	上	上	上	上	上	上	五人
内国教師	八	上	上	上	上	上	上	上	五人
同女教師	八	上	上	上	上	上	上	上	三人
助教現員	六	上	上	上	上	上	上	上	五人
生徒現員	四二六	上	上	上	上	上	上	上	二三人
一カ年收入高	七五七五	上	上	上	上	上	上	上	八九九人
創立以来入学生	一一一四	上	上	上	上	上	上	上	一四五三八人
同卒業生	八〇	上	上	上	上	上	上	上	二〇四一人
所蔵書籍部数	三五六〇	上	上	上	上	上	上	上	二七〇人
財産高	一二八六三	上	上	上	上	上	上	上	三五六〇部
所有地坪数	九三六	上	上	上	上	上	上	上	一四一六八五坪
同建物坪数	一二八六三	上	上	上	上	上	上	上	二二四五三坪
書籍館	一	上	上	上	上	上	上	上	二〇七三坪
講義堂	四	上	上	上	上	上	上	上	一カ所
演説堂	二	上	上	上	上	上	上	上	九カ所
礼拝堂	一	上	上	上	上	上	上	上	二カ所
寄宿寮	一	上	上	上	上	上	上	上	二カ所
食堂	一	上	上	上	上	上	上	上	一七カ所
事務局	一	上	上	上	上	上	上	上	三カ所
事務局	一	上	上	上	上	上	上	上	二カ所

教育事業をことごとく政府の手に任せてしまうのが得策であるとは私たちは思わない。仮にも国民たる者が自分の子どもを教育するのは、まことに国民の義務であり、決して避けてはいけないことであると信じる。そして国民が自ら手をくだして〔私学〕教育を行うならば、それは国民としての義務を果たすだけでなく、その事業は親切に安価に活発にそして周到に行われて、行き届くはずである。このことは、「自分のことは自分で行う」という原則に照らして見れば明白であり、決して疑ってはならない。

わが同志社は微力とはいえ、今日までこのようにして継続してきた。もし幸運にも全国の協力者から賛成を得られるのであれば、私学としますます〔大学にまで〕拡張したいと願っている。私たちは日本の高等教育に關してただ一校、帝国大学〔東京大学〕だけに依存して終わりとするべきではないと信じる。

そもそもわが政府が帝国大学を設立したのは、国民に率先して模範を示そうとしたのであって、日本の大学はすべて政府の手で設立するというのではないと思う。私たち国民は何もしないでただ傍観しているだけでよいのであろうか。

〔私立大学の特性〕

政府の手で設立された大学が実に有益なのは疑いない。けれども国民の手で設立された〔私立〕大学が、まことに大きな感化を国民に与えることも事実である。もとより資金の多さや施設が完備している点から見れば、私立は国立とは比較しようがない。けれども学生が自分独自の氣質を発揮し、自治、自立の国民を養成する点は、これこそ私立大学が持っている特性であり長所である、と信じて疑わない。

教育は実に一国の一大事業である。国民がこの一大事業を無頓着にまた無氣力にただ政府の手にだけ任せておくのは、依頼心のもつともはなはだしいものであって、非常に嘆かわしいことである。およそ一国の文化の源は、決して短期間に生じたものではない。

アメリカなどの場合は、うら寂しくて人がおらず、暴風が吹き荒れ、荒波が吠えたける大西洋の海岸にピュリタン〔ピルグリム・ファーザーズ〕が欧州から（一六二〇年に）移住して十五年もたたないうちに、はやくもハーヴァード大学〔設立は一六三六年〕の基礎が築かれた。そして今日ではその教員数は百十人、書物は十三万

四千冊、基本金は一千四百八十五万四千三百七十二ドルにもこのぼるといふ。アメリカ人が自治的な氣力に溢れているのもこの大学のようなものが大きく影響していると思う。

ドイツの場合などは、わが国の室町時代にあたるところから次々と大学を設け始め、現在ではすでに三十以上の大きな大学が存在する。イタリアにもすでに十七の大学がある。

それに対してわが国には政府の手によって建てられた帝国大学がただ一校あるにすぎないのは、国民を教化するという目的から見ると、欠けるところがないであらうか。国民が教育に目を向けるといふ精神から見ると、不足がないであらうか。国家の将来を考える時に欠けるものがないであらうか。私たちが微力ながらわが国に私立大学を設立したいと考えるのは、実にこのためである。

〔教育の弊害〕

教育というものは人間の能力を発達させるだけでなく、あらゆる能力をまんべんなく発達させるようにしなければならぬ。いかに学問や技術が優れていても、その人間が意志の弱い人物であれば、一国の運命を担うべ

き人物とは決して言えない。もしも教育方針の的外れしているために一国の青年を歪んだ鑄型にはめこんで片寄った人物を養成することがあれば、教育はその国を滅亡させると言うべきであらう。

これまでわが国は、欧米の文化を取り入れるに際し、物質的文明や理論的文明、衣食住や鉄道、汽船、法律、制度、文学、科学思想をもっぱら輸入してきたけれども、文明を生み出すそもその根本に関してはまだ手を着けていないように思われる。それゆえに人心は、自分たちが立ち帰って行くべき場所を見失い、人はただ知識をもてあそんだり、能力を鼻にかけたり、または技術をひけらかしたりして世を渡ろうとするようになる。

しかも、こうした悪弊を改善しようとする者がいないわけではないが、その場合でもただ国民の表面的な文明開化の氣風を直そうとすることだけに力を注ぎ、いわゆる「角を矯めて牛を殺し、枝を析いて幹を枯らす」〔欠点を直そうとして反対に全体をだめにする〕と格言にあるように文明の悪弊を改良しようとして、かえって教育の目的が不自然で強制的なものになってしまふ。

さらにそこでは天真爛漫、自由の中にもおのずから秩序があり、奔放の中にもおのずから自己制御できるよう

な人物、すなわちその人独自の見識を備え、「仰いで天に愧ず、俯して地に愧ず」〔孟子〕中の一節。心にやましさがなく、公明正大であること、自らの腕をふるって自らの運命を切り開くような人物を育成する点で、少々欠けるものがあるのではないか。これこそ私たちが残念に思う点である。

〔品性と精神の養成〕

私たちが見るところでは、欧州文明は様々な形をとっているとはいえず、一般的に言えばキリスト教文明である。キリスト教主義は血液のようにありとあらゆるものに注ぎこまれている。ところがわが国ではただ〔欧米から〕外側の文明だけを取り入れて、キリスト教文明を取り入れない。これでは皮と肉だけを取り入れて、血液はそのままにしておくことにならないか。

今やわが国の青年は皆西洋の文学を修め、また西洋の科学を修めて、わが国を支える第二の国民になろうとしている。しかし、その教育はといえば、立ち帰るべき場所がなく、皆が分かれ路で迷っているようでもある。これを見て私たちは、わが国の将来のために実に嘆かわしく思う。

私たちは微力でたいしたことができないかもしれないが、もしも神が幸運を与え給い、そして世の見識者が私たちの志を援助してくださるならば、私たちは力のない者ではあるが、微力であることを忘れて、この際、必ずこの大任に当たりたい。

要するに私たちは、あえて科学や文学の知識を学ばせるだけでなく、並行してさらにそれらの知識を活用する品性と精神とを養成したいと考える。そしてこのような品性と精神とを養成するには、雑多な理論や管理的な指導法では決してうまくやれるものではない。生命と力とを有するキリスト教主義でなければ可能ではない、と信じる。これこそがキリスト教主義をわが同志社大学の徳育の基本とする理由である。そしてこの教育を行うために同志社大学を設立したいと望むのである。

私たちの目的は以上のとおりである。もしも同志社大学の設立をもってキリスト教を普及させる手段とか伝道師養成の目的と見なす人がいるならば、それはいまだ私たちの考えを理解しない人である。私たちの志すところは、さらに高い。私たちはキリスト教を広めるために大学を設立するのではない。ただキリスト教主義には本当に青年の精神と品行とを磨く活力が備わっていることを

信じて、この主義を教育に適應し、さらにこの主義でもって品行を磨く人物を養成したい、と願うだけである。それゆえに私たちが将来、設置したい大学の専門学科は、現在の同志社にある神学科のほかにまずは政治、経済、哲学、文学、法学などである。もしもこれらの学科をいっせいに設置することができなければ、もつとも設置しやすいものから始めて、順次に進めたい。

「一国の良心」

以上、私たちの目的は、すでに明言したとおりである。したがって、この大学は決して宗教機関でも政治機関でもない。ましてや一地方や一党派の人たちが設置するものでないことは言うまでもない。それゆえに私たちは思うところを正直に申しあげて全国に訴え、全国民の力を借りて永年の志を遂げたいと思う。

もちろん、この大学からはあるいは政党に加入する者が出るかもしれない。あるいは農業、工業、商業に従事する者が出るかもしれない。あるいは宗教のために働く者が出るかもしれない。あるいは学者となる者もある。公務員となる者もある。〔彼らによって〕達成されるものはさまざまなので、あえてあらかじめ定めること

はできない。とはいふものの、これらの人たちは皆一国の精神となり、活力となり、柱石となるべき人たちである。すなわちこうした人たちを養成するのが、実に同志社大学を設立する目的なのである。

一国を維持するのは、決して二、三の英雄の力ではない。実に一国を形成する、教育があり、知識があり、品性の高い人たちの力によらなければならない。これらの人たちは「一国の良心」とも言うべき人たちである。そして私たちはこの「一国の良心」ともいふべき人たちを養成したいと思う。私たちの目的は実にここにある。

諺にはこうある。「二年の謀は穀物を植えるにあり。十年の謀は木を植えるにあり。百年の謀は人を植えるにあり」。

思うに私たちの大学設立のような事業は、実に国家百年の大計であり、なんとしてもとりかからねばならない事業である。今や「帝国議会開設の」明治二十三年も間近に迫ってきた。わが国にこれまでなかった議会が開かれ、国民はかつて経験したことのない政治上の権利に預かれる。これはまことにわが国において永遠に残るべき空前の出来事である。

しかし、もしも立憲政治を百年後にも継続したいので

とを願ってやまない。

明治二十一年十一月

同志社大学発起人

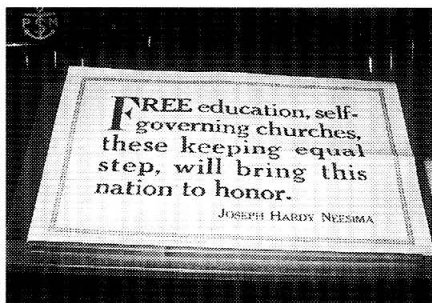
新島襄

京都寺町通丸太町上ル

64

N・G・クラークへの手紙

一八八八(明治二十二年)年十一月十日



(137)新島の終生のモットー「自由教育、自治教会、両者併行、国家萬歳」の英訳(マサチューセッツ州セーラムのビーボディ博物館所蔵)

【VI三九】原英

私たちのかねての志は以上のとおりである。そうした志を抱く私たちが、他方でわが身を顧みると、ちようど斧を研いで針を作るのに似ている。とりわけ私のような者はまことに微力で学識も少なく、国家のために力をつくすと公言しながらも内心では少々、気後れがしないわけではない。

けれども二十年間抱き続けた志は、黙殺するわけにはいかない。わが国の時代の急務を黙殺するわけにはいかない。さらに知人や友人の協力も黙殺すべきではない。だから今日の時勢と環境とが好転してきたことを受けて、わが身の微力にもかかわらず私の生涯の宿願であるこの一大事業、すなわち大学設立のために一身を捧げて取り組みたい。神が私たちの志を祝福し、また社会の有識者が私たちの志を助けて、志を実現させてくださるこ